

# 第 10 回国際全人医療学会

(同日開催)

第 28 回日本実存療法学会

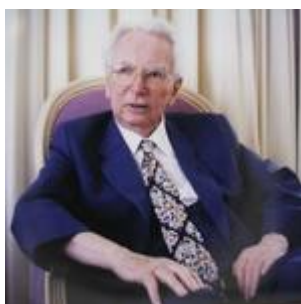
第 35 回日本疼痛心身医学会 / 第 3 回低血糖・血糖値スパイク研究会

国際実存療法士資格認定講習会

プログラム・抄録集

## テーマ 全人的医療を考える

～フランクフル先生と永田勝太郎先生の源流よりの出発～



会期 2023年9月23日(土)10:00-17:00

会場 日本教育会館 8階 第3会議室

主催 公益財団法人 国際全人医療研究所



## 永田勝太郎 プロフィール



公益財団法人国際全人医療研究所 元代表理事  
附属 千代田国際クリニック創設者、初代院長  
WHO（世界保健機関）心身医学・精神薬理学 元教授  
リヒテンシュタイン国際学術大学院 ヴィクトール・E・フランクル講座 名誉教授

1993年5月29日、フランクル博士を招聘し、第1回日本実存心身療法研究会（現 日本実存療法学会）を開催。テーマは「フランクル博士と21世紀医学・医療を考える」。フランクル博士との親交を深めながら、人間の实存性を核とした全人的医療の臨床・研究・教育に精魂を込め尽力し、人間性を重んじた医学教育の構築を目指した。



<経歴> 慶応義塾大学経済学部中退後、福島県立医科大学卒業。千葉大学、北九州市立小倉病院、東邦大学大橋病院麻酔科、浜松医科大学付属病院心療内科科長、日本薬科大学統合医療教育センター教授・センター長などを歴任。池見西次郎教授、ヴィクトール・E・フランクル博士、ステイシー・デイ教授（WHO）に師事。



<役職> 日本実存療法学会 元理事長、日本疼痛心身医学会 元理事長。日本慢性疼痛学会 名誉会員。ヴィクトール・E・フランクル研究所（ウィーン）名誉会員ほか。

<受賞> 「ヒポクラテス賞」「アルバート・シュバイツァー・グランド・ゴールドメダル」「ヴィクトール・E・フランクル大賞」ほか。

<主な著書> 『人生はあなたに絶望していない』（致知出版社）、『血糖値スパイクが万病をつくる！』（ビジネス社）、『本当は怖い「低血圧」』（秀和システム）、『痛み治療の人間学』（朝日新聞出版）、『痛みの力』（海竜社）、『新しい医療とは何か』（NHK ブックス）、『〈死にざま〉の医学』（NHK ブックス）、『心身症の診断と治療』（診断と治療社）、『実存カウンセリング』（駿河台出版社）、『医学・医療総論』（照林社）、『体質・症状・病気で選ぶ漢方薬の手引き』（小学館）など多数。





## 御 挨拶

### 全人的医療の実現を目指して、永田勝太郎先生の志を継ぎ再出発をする

加藤 眞三

第10回国際全人医療学会 大会会長  
慶應義塾大学名誉教授, エムオーエー高輪クリニック院長

2022年11月11日永田勝太郎先生が急逝されたことに、私たち会員は、驚きと悲しみに包まれました。本研究会は永田勝太郎先生個人のご尽力とその広い知識と人脈、そしてご人徳により支えられて続けてきました。永田先生がこの世から旅立たれた後に、この会を続けることは難しいのではないかと私は漠然と考えていました。しかしながら、先日、永田先生の夫人が私のクリニックを訪れ、永田先生の遺志を継続するために研究会を開催したいと相談してくださいましたことから、私はこの研究会を継続させなければと考え直し会長を引き受けました。

私は、永田先生のもってこられた「全人的医療を実現させたい」という夢に共鳴し、本研究会に参加してきましたが、永田先生の心身医学や実存療法に関する博学や深い洞察力にとっても及びません。また、永田先生と私では、性格や対人関係の作り方、医療における手法も異なっていることを認識しています。しかし、余りにも人間が分断される現代の医療、科学的な医療にあきたらず、医療に人間性を復活させたい、全人的医療を実現したいという気持ちは、永田先生に劣らずにもってきました。難病や慢性病患者の患者会に参加したり、キッペス神父からスピリチュアルケアを学び、上智大学グリーンケア研究所の演習にも参加してきました。それらの経験を通して、私も何とかこの会を継続し発展させたいと考えています。

本研究会を継続するにあたり、私は会の原点に立ち戻り、そこから学び、どう活動していくかを皆さんと一緒に対話をしたいと考えています。そして、その原点は、永田勝太郎先生の全人的医療であり、V.E. フランクル先生の実存療法にあります。フランクル先生が実存分析（実存療法、ロゴセラピー）を最初に問われたのは、解放されて間もなくの1946年に刊行された「死と愛」の中です。日本語タイトルは「死と愛」（みすず書房）ですが、原書のタイト

ルは“Arztliche Zeelsorge”です。これは直訳すれば、「医師による魂のケア」です。現在の医療は複雑化し多職種により行われるものとなっているため、今日の状況で意識すれば「医療職者によるスピリチュアルケア」に相当します。

永田先生は、多職種の医療者とチームを組み医療職によるスピリチュアルケアを包含する全人的医療を探求してこられました。永田先生が毎月続けてこられたバリントグループワークも再開しています。対面での大会の開催はコロナ禍により3年間中断されてきましたが、永田先生が亡き後に大会を再開するにあたり、全人的医療とスピリチュアルケアの普及を目指す医療者としてこれから何ができるかを皆さんと対話し、学ぶことにより、活動を広げていきたいと考えています。

どうぞ皆様、永田先生そしてフランク先生の遺志を生かすために奮って大会にご参加下さい。

## プログラム

基調講演 10:00-11:00 座長：青山幸生(東邦大学医学部麻酔科学講座(大橋)客員教授)

**AI時代の医療に求められる全人的医療の普及とは**  
～フランク先生と永田勝太郎先生から何を学び、何を伝えていけるか

**加藤 眞三** (慶應義塾大学名誉教授、エムオーエー高輪クリニック院長)

特別講演 I 11:00-12:00 座長：加藤眞三(慶應義塾大学名誉教授、エムオーエー高輪クリニック院長)

**「夜と霧」フランクをたどって**

**河原 理子** (東京大学大学院情報学環特任教授、元・朝日新聞編集委員)

座長：杉岡良彦(一般財団法人信貴山病院分院上野病院 医療倫理教育部長)

特別講演 II 13:30-14:30 通訳：渡邊一夫(株式会社 SMR 代表 CEO)

**Clinical Logotherapy – Facing the Anguish**

臨床ロゴセラピー — 苦悩に向き合うということ

**Harald Mori** ハラルド・モリイ(Vienna/Austria Psychotherapist ウィーン/臨床心理家)

座長：加藤眞三(慶應義塾大学名誉教授、エムオーエー高輪クリニック院長)

シンポジウム&グループワーク 14:30-16:50 喜山克彦(喜山整形ハーブクリニック 院長)

**私たちが実践する全人的医療とは(シンポジスト講演/全員参加型グループワーク)**

シンポジスト講演 I

**整形外科医療の入口から全人的医療へ—私に何ができるのだろうか?—**

**喜山 克彦** (喜山整形ハーブクリニック 院長)

シンポジスト講演 II

**歯科における慢性疼痛のとりくみ**

**三浦 一恵** (医療法人社団創新会 大森・東京歯科口腔外科・センター長、鶴見大学歯学部 歯科麻酔学講座 臨床教授)

シンポジスト講演 III

**私たちが実践する全人的医療とは—全人的医療のために教育は何ができるか**

**井上 恵** (学校法人長岡総合学園 悠久山栄養調理専門学校 校長)

シンポジスト講演 IV

**全人的医療と医学哲学**

**杉岡 良彦** (一般財団法人信貴山病院分院 上野病院 医療倫理教育部長)





## 基調講演

### AI時代の医療に求められる全人的医療の普及

～フランク先生と永田勝太郎先生から何を学び、何を伝えていけるか

加藤 眞三

慶應義塾大学名誉教授

エムオーエー高輪クリニック院長

2022年11月に公開されたChatGPTはパソコン上や携帯端末上で会話形式の簡単な質問をなげかけるだけで、驚くほどの速さと精度と分量で回答してくることで、AI（人工知能）性能の高さが世界的注目を集めることになった。それ以降、他社の製品をも含めてAIの進歩は加速度を増し、その領域も、会話にとどまることはなく、画像のパターン認識や画像生成、音楽の生成でも人間の一般的な水準を超えようとしている。今後、病理学や放射線の画像診断でAIは幅広く利用されることになるだろう。

このようなAIの進歩が、医療にどのような変化をもたらすのか。内科診断学でも、AIは知識量の蓄積が人間の能力をはるかにしのぎ、アルゴリズムによる診断学が確立した分野で人間は太刀打ちできない。しかし、逆の見方をするなら、知識とロジックで人間が学んできたことは、AIに任すことができることになり、医療者が単調な記憶やロジック思考から解放されることを意味する。医療者は何を学ばば良いのかといえば、コミュニケーションと全人的なケアではないだろうか。

2023年4月JAMA（米国医師会雑誌）に発表された論文で、ネット上の掲示板の質問に、内科医師とAIが回答したものを専門家が評価したところ、医師の回答よりAIの回答が良いと答えたものが78.6%、回答の品質もAIの方が有意に高かった。驚くべきことに、AIの回答の方がより共感的であったとする結果が得られている。このことが意味するのは、今まで医師は共感的に回答するような訓練も受けてこなかったし、感情を無視するような医療であったことだ。実存的問題にまで踏み込む医療者はさらに少なかった。しかし、今後AIの利用が可能となれば、医療者は知識や技術を学ぶ時間、実務にさく時間は大幅に少なくなり、感情や実存的な問題にまで関心を広げられることになる。ヴィクトール・フランク先生や永田勝太郎先生が残した遺産がいよいよこれから医療において活用される時代を迎えるのだ。私たちは、それらを社会に広め活用していく責務があるだろう。

キーワード：全人的ケア、感情、AI、医学教育

## プロフィール

### 加藤 眞三（かとう しんぞう）

---

#### < 現職 >

慶應義塾大学名誉教授  
エムオーエー高輪クリニック院長  
上智大学グリーンケア研究所客員所員

#### < 略歴 >

1980年 慶應義塾大学医学部卒業  
1985年 同大学院医学研究科博士課程単位取得退学  
1985-1988年 米国ニューヨーク市立大学マウントサイナイ医学部内科 Research fellow  
1988-1990年 慶應大学医学部消化器内科助手  
1990-1994年 都立広尾病院内科医長，内視鏡科科長  
1994-2005年 慶應義塾大学 専任講師 消化器内科  
2005-2021年 慶應義塾大学看護医療学部教授  
2021年より現職

#### < 主な著書・論文 >

「患者の生き方；よりよい医療と人生の「患者学」のすすめ」、春秋社、2004年  
「患者の力；患者学で見つけた医療の新しい姿」、春秋社、2014年  
「現代医学から患者中心の医療、全人的医療への移行」、上智大学グリーンケア研究所、  
紀要「グリーンケア」、第9号 2020年

## 特別講演 I

### 「夜と霧」フランクフルをたどって

河原 理子

東京大学大学院情報学環特任教授  
元・朝日新聞編集委員

人生で何度も読み返した本が、私にはいくつもあります。サン・テグジュペリ「星の王子さま」、ヘルマン・ヘッセ「デミアン」、そしてヴィクトール・フランクフル(1905-1997)の「夜と霧」です。初めて読んだのは、心理学を志した学生時代。でも理解不能でした。「夜と霧 旧版」にあったナチスドイツの強制収容所の写真が怖くて、そこで家族を亡くした精神科医である著者の本文がなぜこんなに淡々としているのか、わかりませんでした。

その後、新聞記者になった私は、ひょんなことから、事件や事故などで突然ご家族を亡くした人や被害に見舞われた人たちの話を聴くようになりました。当時は被害者支援も乏しく、私の想像などはるかに超えるお話に衝撃を受け、無力感をおぼえました。よく考えれば、起きてしまったことは誰にも覆せないのに。そして、そうであるなら、変えられない事態のなかで人はどう生きることができるのか……。手がかりを求めて、さまざまな本を読み、集会で学ぼうと、ふと、私の前に、フランクフルが再び現れたのです。

実は、日本は「夜と霧」の原著を、世界で二番目に早く翻訳出版して、長く読み継いできた、フランクフル愛読者の国だったのです。

フランクフルの言葉を杖のようにして生きる人たちがいることをいつか書きたいと私は願いながらも、力不足でかなわず。そんな時期に、永田勝太郎先生のフランクフル賞受賞を耳にして、2008年に取材させていただきました。そこから事態は動き始め、やがて日本とヨーロッパのゆかりの人たちを訪ね、新聞に連載することになりました。掲載時期はたまたま、東日本大震災直後の2011年4～5月。仙台の書店にこの本が積み上げられておりました。

それから私は、フランクフルの提唱したロゴセラピーを学び続けています。

フランクフルの著書がどのように編まれ、読まれてきたのか。彼はどのような体験をしたのか。皆様と一緒にたどり、彼の思想と人生を味わいたいと思います。

キーワード：フランクフル、ロゴセラピー、生きる意味、苦悩する人、良心

## プロフィール

### 河原 理子（かわはら みちこ）

#### < 現職 >

東京大学大学院情報学環特任教授

武蔵野大学客員教授

ジャーナリスト

#### < 略歴 >

1961 年生まれ。

1983 年 東京大学文学部社会心理学科を卒業し、朝日新聞記者に。  
社会部記者、編集委員などを務める。2020 年退社。

2019 年 日本ロゴセラピスト協会 A 級ロゴセラピストに。

2022 年度 上智大学グリーンケア研究所人材養成課程修了。

#### < フランクル関係の著作 >

『フランクル「夜と霧」への旅』（朝日文庫、2017 年、平凡社、2012 年）

『死と愛 【新版】 ロゴセラピー入門』（V.E.フランクル著、霜山徳爾訳、みすず書房、2019 年） 解説

「それでも人生にイエスと言う」『生きる意味の情報学 共創・共感・共苦のメディア』（竹之内禎編著、東海大学出版部、2022 年）

「スペシャル・スーパービジョン 2017 記録／ロゴセラピーを生きること」『日本ロゴセラピスト協会論集』第 10 号（日本ロゴセラピスト協会、2018 年）

「フランクルはどのように読まれてきたのか」『imago 総特集 ヴィクトール・E・フランクル それでも人生にイエスと言うために』（現代思想 4 月臨時増刊号、青土社、2013 年）

「ニッポン人脈記 生きること」（朝日新聞連載、全 14 回、2011 年）

## 特別講演 II

# Clinical Logotherapy – Facing the Anguish

## 臨床ロゴセラピー — 苦悩に向き合うということ

**Harald Mori** ハラルド・モリイ

Vienna/Austria Psychotherapist ウィーン/臨床心理家

和訳：渡邊一夫（株式会社 SMR 代表 CEO）

The topic of this presentation is related to the practical application of clinical logotherapy in the therapeutic and counselling process. The additional title indicates that our life is unimaginable to be a paradise without problems, tragic aspects or threats and obstacles.

As this congress is dedicated to the memory of Prof. Dr. Katsutaro Nagata, my long time of relationship and friendship with Dr. Nagata is described. We know each other since September 1997, the time when Viktor Frankl died in Vienna at the age of 92 and a half years.

Dr. Nagata and Prof. Frankl were definitely very close to each other, despite coming from different cultural backgrounds.

They lived in a self-concept that was carried by personal sympathy and deep scientific, medical understanding.

Mrs. Elly Frankl, almost 98 years old is still living on her own in Mariannengasse 1, the address of Viktor Frankl for half a century. As Jacob Needleman once wrote about her, “She is the warmth, that accompanies the light”. In the preface of one of his books Frankl added this quotation: “May the warmth still persist, when the light has dimmed away”.

Mrs. Kishiko Nagata in my eyes now has that duty to go on, after the loss of a great man and doctor.

本講演のテーマは、治療、カウンセリングの過程における臨床ロゴセラピーの実践的応用に関するものです。サブタイトルは、我々の人生がさまざまな問題や悲しみ、恐れ、障害に遭遇し、常に幸せとは限らないことを示しています。

今大会は永田勝太郎先生（1948-2022）の追悼学会でもありますので、わたくしと永田先生との長きにわたる交流やと深い友情についてもお話しします。我々は、ヴィクトール・フランクル先生（1905-1997）が92歳と半年で亡くなられた1997年の9月、ウィーンで初めて出会いました。

永田先生とフランクル先生は、互いの文化的背景は違えど、非常に親密な関係を築かれました。

彼らは、特別な共感と、深奥なる科学的、医学的理解のもとに自己概念を確立されました。

まもなく98歳を迎えるエリー・フランクル夫人は、今も、フランクル博士と半世紀にわたり暮らしたマリアンゲッサー番地にお住まいです。ジェイコブ・ニードルマン氏（1934-2022/ユダヤ系アメリカ人/哲学者、作家、宗教学者）はかつて彼女について「輝くような明るさを持った温かい人柄」と記しました。フランクル先生の自著序文にも「わが妻エリーの輝く光りが弱くなってもその温かさが永遠に続くことを願う」とあります。

私の目に映る永田貴志子夫人は、偉大な人物であり医師であったご主人を亡くされた今も、その責務を担っておられます。

This congress and my topic relates to the power of meaning and to the possibility, to find an attitude towards tragic and transitory experiences of life.

Facing the anguish means, to reflect in a logotherapeutic way, how it is possible to find ways and attitudes in the inner mind, to cope with tragic aspects of life and with the changes and losses we humans are confronted with.

Dr. Paul Wong, famous psychologist and logotherapist writes: “Existential Analysis is needed to make the clients aware of their spirituality and capacity for meaning”. Viktor Frankl teaches us: “Inasmuch as logotherapy makes him aware of the hidden logos of his existence, it is an analytical process”. As we know, existential analysis means, to help patients and clients to reflect their lives. This reflection at one hand emphasizes the search and finding of meaning. On the other hand, when people are confronted with the “tragic triad”, as Frankl called it, then the existential analysis means finding solutions or an attitude, to manage inevitable suffering, guilt or even death.

Logotherapy and its developments in modern application were not only created to help people in finding their meaning in life. Much more it is a profound goal of logotherapy to enable humans, to develop resilience, to gain hope and instead of being desperate and hopeless, to detect strength, courage, and a strong willingness to activate motivational processes.

Resilience can be helpful, to deal with problems, to solve them, if possible or at least, to get distance to these problems.

Main topics of this presentation include:  
especially: 1. Anxiety and 2. Depression

Also, further aspects are shortly described and imbedded in the text about the treatment of anxiety and depression, such as: Frustration, Embitterment and Humiliation, Severe diseases, hopelessness and resilience, End of life and visions, The importance of autonomy, Transitoriness and its handling, Meaning and

本大会そして私のテーマは、人生の悲劇的ではかない経験に対する態度に対して、生きる意味の力とその可能性を見つけることに関するものです。我々が苦悩に直面したとき、ロゴセラピーを活用し、人生の中で避けることのできない悲劇的な事柄や、変化、喪失感に対処する方法や態度を、心の内でどのように見つけることができるのかを考えることです。

著名な心理学者でロゴセラピストのポール・ウォン博士（1937- / 中国系カナダ人 / 臨床心理学者、教授）は、「患者に自分の精神性と生きる意味を気づかせ、理解させるためには、実存分析が必要である」と記しておられます。ヴィクトール・フランクル先生は、「ロゴセラピーは自分の存在の隠された生きる意味に気づかせるものであるゆえに、分析的な過程と言える」と書いておられます。ご存知のとおり、実存分析とは、患者が自分の人生を省みるのを手助けすることを意味します。この内省的考察は、一方では生きる意味の探求と発見に重点を置きます。一方、人々が、フランクル先生が名づけた「苦境の三角形（苦難・罪・死）」という事態に直面したとき、実存分析は、それらの避けられない苦難、罪悪感、さらには死に対処するための解決策や態度を見つけることを意味します。

ロゴセラピーとその現代的応用における発展は、人生の意味を見つけるための支援だけではありません。さらに、ロゴセラピーの深遠な目標は、人が回復力（レジリエンス）を養い、希望を持ち、そして自暴自棄になって絶望する代わりに、強さや勇気、動機づけへの過程を活性化させようとする強い意志を見出せるようにすることです。

回復力（レジリエンス）は、さまざまな問題に対処し、それらを解決するため、可能ならばあるいは少なくとも問題から距離を置くために役立つでしょう。

本講演には、特に、次の二つの主題があります。1つ目は不安、そして2つ目はうつ病です。また、不安と抑うつ治療に関するさらなる側面も簡単に説明し、失望、憤りと屈辱、重篤な病気、絶望とそこからの回復力（レジリエンス）、終末期の心構え、自律性の重要性、無常感（はかなさ）とそれへの対処、生きる意味と悲劇

tragic optimism, Inner freedom and the position of a person in the cosmos.

A description of the logotherapeutic tools of dereflection, paradoxical intention, modulation of attitude, finding of attitude follows.

The founders of family therapy and of salutogenesis are presented with their theories, Harry Merl and Aaron Antonovsky.

#### Conclusion:

In his famous book, *Medical Ministry (The doctor and the soul)* already in 1946 Viktor Frankl wrote the following, very profound words:

“With his unique destiny, each man [and of course every woman] stands, so to speak, alone in the entire cosmos. His destiny will not recur. No one else has the same potentialities as he, nor will he himself be given them again. The opportunities that come his way for actualization of creative or experiential values, the tribulations which are destined to come his way – which he cannot alter and must therefore endure and in the enduring of them actualize attitudinal values – all these are unique and singular.”

[Frankl, 1986, p.75]

的な楽観主義、内なる自由と宇宙における人間の立場などについて本文に加えています。

反省除去、逆説志向、態度の調整、態度の発見といったロゴセラピーの実際の治療法に関する説明が続きます。

ハリー・メルル博士（1934- /ウィーン出身のユダヤ人 / 精神分析医、医師、家族療法士 / アウシュヴィッツ強制収容所への送還を一家で回避。親族はホロコースト犠牲者）と健康創成論の提唱者アーロン・アントノフスキー博士（1923-1994 / ユダヤ系アメリカ人 / 健康社会学者）の理論もご紹介します。

#### 結論：

フランクル先生は、かねてより 1946 年に有名な著書『*The Doctor and the Soul*』の中で、次のような深遠な言葉を記されました。

“すべての人は、独自の運命を持って、いわば全宇宙の中で孤独に立っています。彼の運命は繰り返されません。彼と同じ可能性を持った人は誰もいないし、彼自身もまた、その可能性を再び与えられることはありません。創造価値や体験価値を実現するために彼に訪れる機会、また更に彼に訪れる運命的な艱難、それは置き換えることができないため耐えなければならず、耐えることで態度価値を実現するものでありますが、これらはすべて稀に現れる唯一なものです。”

[フランクル、1986年、p.75]

プロフィール

Harald Mori (ハラルド・モリイ)

< 現職・略歴・著作ほか >

Harald Mori MSc (Pth.), Master of Science in Psychotherapy. Licensed psychotherapist (Existential Analysis and Logotherapy) Private practice since 1991. Born 1962 in Klagenfurt am Wörthersee.

Medical and psychotherapeutic (Cand.med. and MSc in Psychotherapy) studies in Graz, Vienna and Munich. Licensed Psychooncologist (1998)

Former Lecturer at the “MUW, Medical University of Vienna” – “Viktor Frankl Seminar”.

1987-1997 student and personal assistant of Prof. Viktor Frankl.

President of MFA-Medical Viktor Frankl Association Vienna. (Fd.2001)

Global lecturing about LTEA and psychotherapy.

Publications: “Synoptische Psychotherapie” (2015) and “Existenzanalyse und Logotherapie” (2020/2023) and numerous articles about Viktor Frankl, Logotherapy, Existenzanalyse and Psychooncology.

He is teaching at universities and psychotherapy institutes in Europe and globally, like in Brazil, Argentina, Canada, USA, Ukraine, South Korea, and Russia, and recently in Peru, Japan, and Kazakhstan.

In January 1987, Harald Mori had the honor to meet Prof. Viktor E. Frankl personally. In the following ten years, he became his student and assistant, at Frankl’s University lectures in Vienna as well as in many of his very personal matters. On invitation of Prof.Dr. Katsutaro Nagata, Harald Mori contributed to congresses in Japan more than 5 times.

Corresponding address:  
 Erdbrustgasse 46/3  
 1160 Wien  
 Austria  
 haraldmori@aon.at  
 www.viktorfrankl.at

ハラルド・モリイ, 心理療法学修士。認定心理療法士(実存分析とロゴセラピー)。1991年 開業。1962年生まれ。オーストリア最南部ケルンテン州の州都クラゲンフルト・アム・ヴェルターゼー出身。

オーストリアのグラーツ、ウィーン、ミュンヘンで学び、医師受験資格および心理療法修士を取得。1998年 認定腫瘍学心理療法士。

ウィーン医科大学 (MUW) にてヴィクトール・フランクル・ゼミナールを受け持つ。

1987-1997年 ヴィクトール・フランクル博士の生徒兼アシスタントとなる。

ヴィクトール・フランクル医学協会会長就任(2001年設立)。LTEA(ロゴセラピーと実存分析)および心理療法に関する国際的講演活動を行う。

著作:「共観的心理療法(2015年)」、「実存分析とロゴセラピー(2020/2023年)」他、ヴィクトール・フランクル、ロゴセラピー、実存分析、サイコオンコロジー(精神腫瘍学)に関する著作多数。

欧州をはじめ、ブラジル、アルゼンチン、カナダ、米国、ウクライナ、韓国、ロシア、最近ではペルー、日本、カザフスタンなど、世界各地の大学や心理療法研究所において教鞭をとっている。

1987年1月、幸運にもヴィクトール・フランクル博士との邂逅の機会を得る。以来10年の間、ヴィクトール・フランクル博士の大学での教鞭活動における生徒兼アシスタントとして、また、博士のプライベート活動をも支える。故永田勝太郎先生の招聘により、日本の学会出席のためこれまで複数回来日。

連絡先:  
 エルトブルストガッセ 46/3  
 1160 ウィーン  
 オーストリア



## シンポジスト講演 I

## 整形外科医療の入口から全人的医療へ —私に何ができるのだろうか?—

喜山 克彦

喜山整形ハーブクリニック 院長

整形外科医学は、自然科学の方法論のうち主に機械論的な人体の捉え方により、運動器の機能障害や痛みを治療する。しかし、特に整形外科医療の一部の専門領域に特化してない、一般整形外科開業医療において、そのような捉え方では解決できない全人的な問題が背景に存在する運動器の機能障害や痛みを抱えた患者が受診する。そこで整形外科専門領域を含んだ、運動器の機能障害と痛み全般に対して対応できる包括的な医療体系が必要となる。当院では、運動器の機能障害と痛みに対して、大きな体系として、永田勝太郎が提唱した、身体・心理・社会・実存的医療モデル（BPS-Eモデル）を導入し、マイケル・バリントの説く開業医療をモデルとした。また、地域の患者に対するニーズがあり、専門医療の隙間にある領域への治療を、専門性の境界を超え、できる限り拡げていく方針を立てた。

当院は一人医師のクリニックで、引き受ける医療の幅を広げることには限界がある。それでも、整形外科の専門医としての視点と、BPS-Eモデルのその混在した捉え方に自分自身が混乱し、苦悩しつつ、「私に何ができるのだろうか？」の問いに答えてきた実際の臨床を報告する。

永田先生は、常日頃「整形外科にこだわるな」とおっしゃっていました。私は、それに逆らって整形外科医療にこだわった全人的医療を目指し続けました。先生はさぞ不愉快であったことと思います。運動器の機能障害と痛みを扱う整形外科医療だからこそ、全人的医療が生きる場があると考えたからです。逆らってしまった永田先生から、私のこの姿に対して、叱咤されるも少しでも良い評価を受けたいと願っています。

キーワード：全人的医療、身体・心理・社会・実存的医療モデル、マイケル・バリント

## プロフィール

### 喜山 克彦（きやま かつひこ）

---

#### < 現職 >

喜山整形ハーブクリニック 院長

#### < 略歴 >

鹿児島県与論島出身

1962年 鹿児島県指宿市生まれ

1983年 東京学芸大学教育学部中退

1992年 琉球大学医学部卒業

1992年 琉球大学医学部附属病院整形外科入局

2004年 浜松医科大学心療内科にて研修

永田勝太郎先生に師事する

2010年 静岡県富士市に一般整形外科クリニックを開業

整形外科医ができる全人的医療を模索し続けている

#### < 専門医・資格 >

日本整形外科学会専門医

日本東洋医学会漢方専門医

上級国際実存療法士

## シンポジスト講演Ⅱ

## 歯科における慢性疼痛のとりくみ

三浦 一恵

医療法人社団創新会 大森・東京歯科口腔外科・センター長  
鶴見大学歯学部 歯科麻酔学講座 臨床教授

口腔顔面領域に痛みがある時、歯科医院を訪れることが多い。疼痛の原因は歯や歯周組織が原因であることがほとんどで、患者の訴えている痛みには原因となる疾患が明確に存在し、その歯科疾患に対して適切な治療が行われれば、痛みが長引くことはない。しかし、必要な治療を行ったにもかかわらず、痛みが続き不可逆的な処置が繰り返されることもある。また手術や歯科治療により三叉神経末梢枝を損傷するため、三叉神経に機能障害が生じ感覚鈍麻、異常感覚、神経障害性疼痛、痛覚変調性疼痛に移行していき慢性化することもある。近年、マスク生活が長くなり、食事時にきちんと噛んで食べない、対面で表情を豊かにして会話をしていないなど口腔機能を十分発揮しないことによって不具合も出ていていると感じる。口腔内に器質的な変化や咬合異常がないにもかかわらず、舌がひりひりする、食事ができない、眠れないなど患者の訴えが歯科医師を悩ませる。

このような患者に対して逃げずに訴えを受け入れ、患者と問題解決していく姿勢をみせることが大切であると考えます。ドクターショッピングを繰り返している患者さんは薬物治療もブロック治療も既に受けているが、基本的な診査、診断をもう一度行い、見落としがないかを確認する。慢性疼痛は患者一人ひとりに多様性、不均一性、複雑性があるため、患者とゆっくりお話をし、患者が自分の持つ痛みを見つめ受容して、それを解決できる資源を持っていることを自覚することを期待する。鍼灸経絡治療は患者と話しながらできるという利点がある。また、姿勢、呼吸をアドバイスしたり、運動を促したり食事セルフコントロールができるよう手助けする。

今回は痛みを訴え続け抜歯を繰り返した症例、抜歯後の慢性疼痛の症例などを提示し、参加者の皆様にご意見を伺っていきたい。

キーワード：慢性疼痛、鍼灸経絡治療、痛覚変調性疼痛

## プロフィール

### 三浦 一恵 (みうら かずえ)

#### < 現職 >

医療法人社団創新会 大森・東京歯科口腔外科 センター長  
鶴見大学歯学部歯科麻酔学講座 臨床教授

#### < 略歴 >

1983年4月 鶴見大学歯学部附属病院歯科麻酔 臨床助手  
1984年10月～2011年3月 鶴見大学歯学部歯科麻酔学講座 助手→助教  
2011年4月～現在 医療法人社団創新会 大森・東京歯科口腔外科センター長  
2012年4月～現在 鶴見大学歯学部歯科麻酔学講座 臨床教授

#### < 専門分野 >

日本歯科麻酔学会認定医、専門医  
日本口腔顔面痛学会認定医、専門医、指導医  
日本慢性疼痛学会 慢性疼痛専門歯科医師

## シンポジスト講演Ⅲ

## 私たちが実践する全人的医療とは —全人的医療のために教育は何ができるか

井上 恵

学校法人長岡総合学園 悠久山栄養調理専門学校 校長

医療現場の勤務経験がない私である。長らく義務教育現場に奉職し、現在は高等教育の現場に身をおいている。教職に就いて以来、最も関心をもってきたのが不登校や非行など「たいていの教師が担当したくない生徒」だ。さらに「登校している不登校生徒」にも興味津々であった。ある時、永田先生のインタビューが掲載された新聞記事を目にして「この方こそ！」と直感、迷わず手紙を書いた。これが永田先生に出会う端緒となり、長らくご指導をいただいた。永田先生は常々「医学教育において態度教育を！実存療法を！」と口にしておられた。それは全人的医療の実現のためであり、きわめて重要なことである。ところが、医学教育は高等教育であり、それより前に初等中等教育が存在する。医者をめざす医学生はすべてここを通過する。

この初等中等教育の段階において、できることがあるのではないか。そしてそれは高等教育におけるアプローチより全人的医療の実現に奏効するのではないだろうか。私はずっとそう考えてきた。仮説としての私の答えは、全人教育であり、実存療法を用いた生徒指導、そして思春期、青年期における重要な他者との出会いである。

初等中等教育、とりわけ義務教育は国民のライフラインである。しかしながら、初等中等教育において課題は山積している。それらは、医学教育において永田先生が危惧されてきたことと通底すると思われる。全人的医療に資する初等中等教育の実践を願って私見を述べてみたい。

キーワード：全人的医療を支える全人教育、教育のもつ外部性、ライフサイクル  
対人援助職の要諦

## プロフィール

### 井上 恵 (いのうえ めぐみ)

---

#### < 現職 >

学校法人長岡総合学園 悠久山栄養調理専門学校 校長

#### < 略歴 >

大阪府出身

1975年 お茶の水女子大学理学部数学科卒業

1978年 同大理学研究科修士課程数学専攻修了 理学修士

主として新潟県中学校教諭および管理職として奉職

2019年より現職

2020年 上級国際実存療法士取得

#### < 所属学会 >

日本実存療法学会

日本疼痛心身医学会

日本心身医学会

日本慢性疼痛学会

日本疼痛学会

日本学校メンタルヘルス学会

## シンポジスト講演 IV

## 全人的医療と医学哲学

杉岡 良彦

一般財団法人信貴山病院分院 上野病院 医療倫理教育部長

全人的医療は、近代科学の発達以降、生物学的観点を重視する生物医学へのアンチテーゼでもあった。特に日本では池見酉次郎らによる心身医学分野の医療者が主に全人的医療の重要性を医学界に伝えてきた。全人的医療の実践において見逃されがちなのは、全人的医療がそれまでの医学とは異なる新たな人間観を基礎としているという点である。この点を鋭く指摘したのが永田勝太郎である。永田は、精神科医 V.E. フランクルのロゴセラピーの背景にある人間観を考慮しつつ「身体・心理・社会・実存的モデル」を提唱した。

一方で、医学哲学（医学概論）は、日本においてはフランス哲学を専門とする澤瀉久敬（1904 - 1995）によって構築された。それは医学という学問そのものを哲学的に反省し、より良い医学を作り上げようとする営みである。澤瀉はその著書『医学概論』の中で医学概論を科学論、生命論、医学論の三つの分野から構築した。澤瀉が特に強調したのは医学が単に科学の立場から論じられるだけではなく、科学を生み出した「生命」の立場から論じられなければならないと主張した。「生命」は、東洋では「気」とも言い換えることができ、そこから当時の医学の主流では重視されていなかった東洋医学の必要性を澤瀉は早くから主張していた。

実際の医療現場では、さまざまな悩みや苦しみをかかえた患者やその家族に出会う。そこにはすでに科学的に有効な治療法が見いだせないがん終末期の患者や、生涯にわたり治療が必要となることが多い統合失調症の患者、交通事故や脳梗塞などで麻痺や障害が残った患者もいる。医療者に求められているのは、こうした患者やその家族を身体・心理・社会・実存的視点から全人的に理解し、共感的に支える態度であり、こうした態度を養うには、医学哲学的な人間観が必要であろう。国際全人医療研究所は永田博士の意志を受け継ぎ、今後もこうした医学哲学教育を提供する場としての重要な役割を有している。

キーワード：全人的医療、医学哲学、身体・心理・社会・実存的モデル、人間観、  
国際全人医療研究所

## プロフィール

### 杉岡 良彦（すぎおか よしひこ）

#### <現職>

一般財団法人信貴山病院分院 上野病院 医療倫理教育部長

#### <略歴>

1990年 京都大学農学部（農学原論講座）卒

1998年 京都府立医科大学卒

2004年 東海大学大学院医学研究科博士課程修了

2005年から旭川医科大学医学部助手、講師をへて、2017年より現職。

2020年より京都府立医科大学にて「医学哲学」担当

2021年より京都府立医科大学「現代医療の人間観」担当

#### <資格>

医師、博士（医学）、精神保健指定医

#### <専門分野、その他>

医学哲学、精神医学

#### <単著および受賞>

『哲学としての医学概論：方法論・人間観・スピリチュアリティ』（2014年、春秋社）  
（2015年 日本医学哲学・倫理学会 学会賞受賞、2015年 人体科学会 湯浅泰雄著作賞受賞）

『医学とはどのような学問か：医学概論・医学哲学講義』（2019年、春秋社）

『共苦する人間：医学哲学から宗教と医学を考える』（2023年、春秋社）

『哲学としての医学概論：方法論・人間観・スピリチュアリティ』において 2015年 日本医学哲学・倫理学会学会賞。2015年 湯浅泰雄著作賞。

#### <共著>

『脳科学は宗教を解明できるか：脳科学が迫る宗教体験の謎』（2012年、春秋社）

#### <翻訳>

H.G.コーニック『スピリチュアリティは健康をもたらすか—科学的研究にもとづく医療と宗教の関係』（2009年、医学書院）など。



